

高等小學修身書

卷一

T1A3
22
(H55k)



文部省  
檢定  
濟定訂

伯爵副島種臣  
伯爵東久世通禧  
著

高小  
學修身書  
卷一

東京  
國光社圖書部

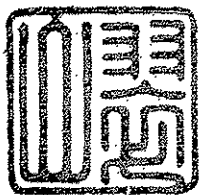
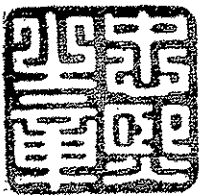


忠  
孝  
一途



明治廿五年九月

三位勲等近衛忠熈



高等小學修身書卷之一

東久世通禧 著

副島種臣 閱

第一 君の恵

第一課

我が國代々の 皇上は、皇祖の御遺訓に則  
らせ給ひて、あつく、臣民をあはれませ給へり。  
臣民のおのく、其の業にやすむじて、樂しく、  
世をわたることを得るは、みな、皇上の御恵



にあらすといふことなし。もし、萬民の内、一人にても、其の處を得ざるものあるときは、代々の皇上、みな、御自の事のごとく思召させ給ひて、大御心を安めさせ給ふひまとはおはさぬなり。豈、尊くも、また、畏きかぎりならずや。

### 第二課

天智天皇の大御言に宣はく、朕は、國の父母として、常に、萬民のために、心を苦しめ、晝夜思はざることなし。汝萬民、子として、父母の教に

たがふことなかれ。日本紀

後醍醐天皇の御製にも、

世をさまり民安かれと祈るこそ

わが身につきぬ思なりけれ續後拾遺集

とあり。實に、代々の皇上の、深くあつき大御心には、何物か、よく、之にたぐへ奉るものあるべき。

### 第三課

醍醐天皇と申し奉るは、下民をあはれませ給ふ御心、まこと、厚くおはしまして、常に、みづ



から、勉めはけみて、世の安らかならむことを  
圖らせ給へり。ある冬の夜、風ふき、雪ふりて、い  
と寒きに、畏くも、御衣をぬがせ給ひて、今夜は、  
いとさゆるなり。下民の寒苦、そこを思ひやら  
るれと宣はし、御事ありき。また、群臣の、事を  
奏上する毎に、かならず、龍顔をやはらけて、  
之をさこし召させ給へり。嘗て、宣はするやう、  
威嚴、外にあらはるれば、言を盡しがたし。故に、  
朕、群臣の、事を奏上する毎に、かならず、辭色を  
やはらけて、以て、その言を盡さむことを求む

るなりと。いかに、有りがたき 大御心ならす  
や。代々の 皇上も、皆、かくの如く、臣民の勞苦  
を察し、臣民のためには、大御心を、千々にわ  
づらはせ給はざるはおはさぬぞかし。

## 第二 忠君

### 第四課

我が國の臣民たるものは、皇祖の、國をはじ  
めさせ給ひし御時より、皇上に仕へ奉りて、  
世々、あつき、大御惠の下に、家をつたへ、生を樂  
しみ來りたるものなり。されば、この身は、何時



にても、大君にさへ奉るべきものにして、事あらむときは、身命をかへりみずして、御國を護り、皇運の、ますく、榮えまされむことを勉むべし。これ、皇上に仕へ奉る忠義の道にして、また、已が祖先に事ふる孝行の道なり。

第五課

臣民の、忠勤をはけむといふことは、たゞに、事あるときのみならず。太平の世には、各、其の職を勉め、業を勵みて、たまく、困難の事に出であふとも、何事も、君國の御爲と思ひて、いさゝ

かも怠ることなかるべし。かくの如く、其の職分を全うせんためには、身命をも顧みざること、これ、太平の御代につくす忠義といふべきなり。

君が爲世のため何かをしからむ

すてゝかひある命なりせば 新葉集

第六課

後醍醐天皇、北條高時をほろぼさせ給はむとして、楠正成を、笠置山の行在所に召し、討賊の事をゆたねさせ給ふ。正成、かしこまりて、奏





上するやう、皇上に叛き奉る者、いかでか亡  
びざるべき。されど、勝敗は、戦の常なり。たとひ、  
軍、やぶるゝことありとも、臣、未、死なずときこ  
し召さば、叡慮となやませ給ふこと勿れど。  
河内にかへり、赤坂に城さぬ。かくて、備、未、完か  
らざるに、笠置山はおち、天皇は、隠岐の島に  
うつらせ給へり。正成、わづかに、五百人を以て、  
赤坂を守り、あはぐ、賊兵を苦しめしが、兵糧  
とほしくて、終に支ふべからざるをはかり、城  
をすてゝ、金剛山にかくれぬ。其の後、赤坂を復

し、千窟に城さしに、賊、また、大舉して、これを圍めり。正成、あきりに、奇計を出し、くたみに、之を破り、大に、賊兵を苦しめたり。たましく、新田義貞、上野におこりて、鎌倉を亡し、天皇は、隱岐の島を出で、伯耆に行幸せさせ給ひ、官軍の勢、日に、熾になりて、遂に、千窟の圍もとけぬ。ここに於いて、車駕、行在所を發して、京師に還幸せさせ給ふ。時に、正成、兵を率ゐて、兵庫に迎へ奉りしかば、天皇、いたく、悦ばせ給ひ、うく、速に恢復したるは、實に、汝が力なりと宣はして、

親しく、ねぎらはせ給へり。正成、かしこまりて、陛下の御威徳によらずば、臣、いかでか、賊の圍をいで、また、今日にあふことを得むと奏上し、やがて、前驅して、都に入れり。

#### 第七課

其の後、足利尊氏をむくに及び、正成、あはれ、之をやぶり、遂に、西海に走らしめたり。既にして、尊氏、西海の大軍を率ゐ、ふたたび、京師に攻め上るにあたりて、正成、はかりことを獻じ、車駕を、山門にうつし奉り、賊を、京師に入れ、あは



らく、其の勢氣をひしぎ、而して後に、攻め亡さむとしたりしも、藤原清忠、之をさへぎりぬ。正成、やむをえず、弟正季等と、御所を辭し、櫻井の驛にいたりて、子正行に諭すやう、今度の戦は、まことに、天下安危のわかるゝ所なり。吾死なば、天下は、遂に、尊氏の手に歸せむ。汝、いやしくも、私のために、忠義を忘るゝことなく、かならず、身を、國に殉し、死にいたるまで、決して、屈すべからず。汝が孝は、之に過ぐるることなしと。即、綸旨と、恩賜の寶刀とを、正行にさづけて、河

内にかへらしめたり。かくて、正成は、正季と共に、湊川にいたりて、力のかぎり、ふるひ戦ひしかども、衆寡敵せず、部下の將士、おほくは、戦死して、残り少くなれり。乃、近傍の民家に入り、鎧をときなぐら、正季をかへりみ、死にて後、更に、何をかすべきと問へば、正季は、何とぞ、七たびも、人間にうまれて、國賊をはろばさむと答へぬ。正成、之をきゝて、欣然として、互に、刺しつらぬきて死にき。時に、正成は、年四十三、正季は、年三十二。天皇、さこしめし、大に哀悼し、詔して、

正三位左近衛中將をねくらせ給へり。明治の御代にねよび、詔して、湊川神社をたて、別格官幣社に列し、また、更に、正一位を贈らせ給へり。

### 第三 親の恩

#### 第八課

父母は、我が子の爲には、いかなる艱難辛苦もいふことなく、唯、ひたすらに、安全に成長して、身を立て、世に出でむことを祈り給へり。すべての事々につけて、心を勞し、いさゝかの事に

ても、ねんごろに、教へさとし、思を千々にたきて、始終、苦勞のたゆるひまなきは、實に、父母なり。志かのみならず、其の慈愛のふかき爲には、我が身の上をも忘れ給ふものなり。

#### 第九課

### 古歌に、

志ろがねも黄金も玉も何せむに

まされる寶子に志かめやも 萬葉集

また、

人の親の心はやみにあらねども



子を思ふ道に惑ひぬるか後撰集  
とある如く、慈愛の心は、誰の親も、みな、異ることなし。子たるもの、豈、おろそかに思ふべけむや。

第十課

膳臣巴提便は、欽明天皇の御代の人なり。嘗て、勅をうけたまはりて、百濟に使し、妻子を伴ひて、かの國の海濱に宿りき。巴提便、一子あり、又なきものに愛で、いつくしみ居たりしに、其の夜、にはかに、ゆく所を知らずなりぬ。兩親は、

肝心も失せ、手をつくして捜し、かきも、遂に見あたらず。をりしも、大雪ふりて、外へ出づること能はざりければ、夜の明くるをまちて、此處彼處たづぬる中に、虎の足跡を見出でぬ。巴提便、かならず、其の虎のなし、わざならむと思ひ、力を帶び、其の足跡を尋ねつゝ、行きて、巖岫に至れば、果して、伏せる虎あり。巴提便、眼を瞋らして、大に怒り、汝、いかなれば、我が愛子を失ひしぞ。吾、今、こゝまで、追跡して、愛子のうらみと報いむとて、來りたりと呼はりけれ



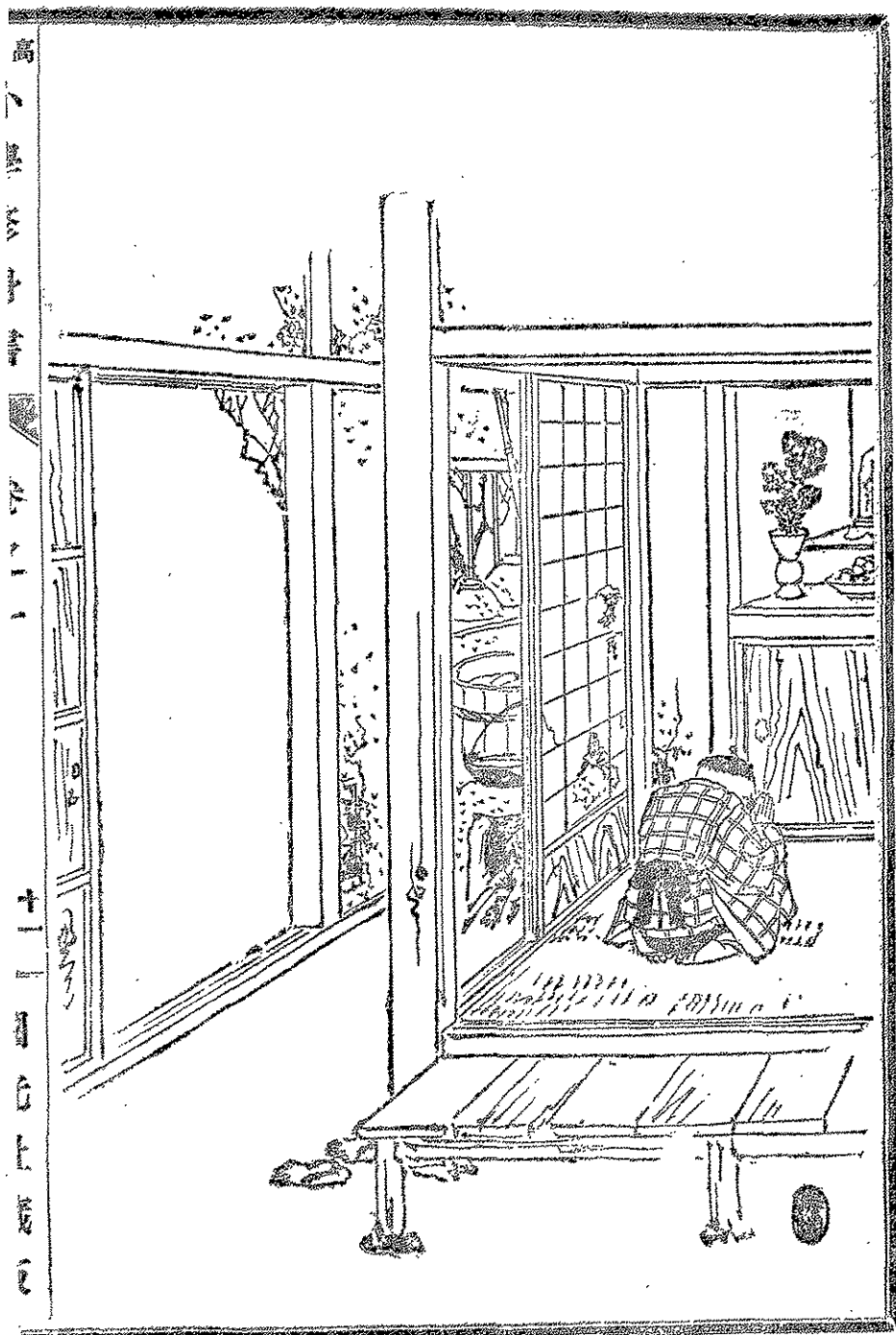
をけがさる、これ、亦、孝の道において、重むる所なり。初學訓

覆育フキユてし親なかりせばいかにして

さみの恵とわれはうくべき古郷紀行

第十三課

昔、備中國淺口郡中村に、長吉とて、幼き子供ありき。父、久しく、病に臥したりければ、長吉の悲、大方ならず。日夜、側を去らずして、孝養をつくし、看護にをこたりなかりしも、もとより、家貧しくて、魚を買ひて、父にすゝむることも





叶はず、つねに、海濱にゆき、雜魚を、漁人に請ひ得て、之をすゝめぬ。かく、孝養をこたりなかりしかども、その甲斐なくて、父は、終に死にたり。長吉、此の時、僅に、十歳にして、貧苦、ますます、甚しかりき。その後、母は、人の勸によりて、其の弟を伴ひ、ふたゝび、他に嫁けり。長吉、これより、いかにもして、父の家を相續せんと、あらゆる苦勞を嘗め、勤業に、餘念なく、常に、靈位を、櫃中に安むじて、朝夕、之ををがみ、食事には、必、まづ、その靈位にそなふるなど、之に事ふる

こと、生前に異ることなし。かくて、他人の僕となりて後、忌日にあふごとくに、追慕の情、いと、切にして、いさゝかも、祭祀の禮をかくことなく、且、平素、母を省ることも厚かりしかば、其の事、いつしか、領主にきこえて、米若干を賜りたり。時に、長吉は、十三歳なりき。

第五卷

第十四課

兄弟姉妹は、父母の、同じ恵の下にそなてられ、食ふに、器を同じくし、寝ぬるに、室をひとしく

して、生ひ立ちしものなれば、たとひ、形はわか  
るとも、身は、なほ、一體の如きものなり。されば、  
兄の耻は、弟の耻となり、妹の辱は、姉の辱とな  
るものゆゑ、互に、相助け、相寄りて、身を立て、家  
と起すべきなり。利慾のため、又は、いさゝかの  
事に、あらそひ怨みなぞして、この天倫をやぶ  
るが如きは、いかにも悲しむべきことにして、  
不孝の大なるものといふべし。

第十五課

松平定信は、桑名の藩主なり。友愛の情あつく、

兄定國とのなからひ、甚、むつまじかりき。定信、  
嘗て、濱千鳥の繪に、繼色紙あるを、兄の許にお  
くり、父田安宗武のよみたる、

千鳥さへ友よびかはし遊ぶあり

なぞてや人のひとり樂しむ

といふ歌を書きてたまへと需めしに、定國よ  
りも、おなじ物をつかはし、此にも書きてよと  
需めたりき。されば、兄弟、書ぶりを示しあは  
せて、雙方より、同じ日に贈りたりとぞ。

第十六課

伊勢國一志郡に、横田新助といふものあり。父母、久しく病みて、耕作もせざりければ、家、やうやく、貧しくなりて、親子數人の生計にさへ、乏しくなりぬ。時に、新助、年十四なりしが、心に思ひけるやう、かくて、月日を過ぎなば、父母兄弟ともに、飢ゑこゝゆるに至るべし。この身は、いかに苦しむとも、父母兄弟が、今の困苦にくらぶれば、何程のことかあらむと、俄に思ひさため、みづから、他人の僕となり、其の給金をもて、家計を助けぬ。それより、十年を経て、家にかへ

り、妻とむかへ、専、農業をはけみ、又、他人にやどはれ、賃金を得なとして、父母兄弟の好む物を求むる料とせり。かくて、數年の後、遂に、父母は、病死し、弟六人も、つゞきて死に、不幸に、不幸を重ねたるに、力とたのむ兄の久吉さへ、發狂し、一家の困難、たとへむ方なし。されども、新助、すこしも厭ふ心なく、晝夜、兄の看護に、心を用ゐ、敬愛をつくすこと、父母に事ふる如くし、其の間には、家業をはけみて、さきの借金をかへし、納税もとこほることなかりき。新助、かやう



等に、奇特の行多うりしかば、世人の模範なりとて、官より、あつく賞與せられたり。

## 第六 信義

### 第十七課

人に交りては、信義をあつくすべし。信とは、言ひてたがはざるなり。義とは、行ひて、宜しきに合ふなり。偽らず、邪ならず、内心、誠あるは、即、信義なり。もし、この信義といふことを失ふときは、すべての行、みな、輕薄にして、人たる面目は、たもち得られぬものなり。ことに、朋友に交

るには、信なければ、まことの交は、なし得られぬものとするべし。

### 第十八課

朋友は、信をあつくし、互に、善をすすめ、惡をいましむ。これ、朋友の道なり。もし、過惡を見ながら、諫めざるは、信なきなり。朋友の道にあらざるなり。又、朋友は、たのもしけありて、難あらば、相助け、患あらば、相救ふべし。初學訓

何せむに違ひは居らむ否も諾も

友のなみく 吾もよりなむ 萬葉集

第十九課

蒲生君平、平田篤胤と、ふかく交りけるが、一日、君平、篤胤を訪へり。篤胤、之をむかへて、坐に請じ、閑談數刻にして、たましく、山陵の事にうつりけるに、篤胤、君平に問ひけるやう、君は、漢學を究め、我は、國學を修めたり。君と、我との如きは、學問の上よりいはゞ、いかゞ名づくべきかと。君平、直に、朋友なりと答へぬ。篤胤、又問ふ。朋友の交は、いかにせば善からむと。君平曰はく、意に隔なく、互に、あしき事をいさめ、よき事



をたすけ勸むること、朋友の道なれど。篤胤、然らば、君が著し、山陵志に、あやまれる所あれば、余、之を訂正せむと欲す。君のこゝろ、果していかにといへば、君平歡びつゝ、謹みて、教を受けむといへり。其の後、山陵志を訂正せしは、篤胤の力による所、最多しといふ。

## 第七 禮儀

### 第二十課

禮儀とは、立居、ふるまひ、言葉のつかひざま等に、作法ありて、漫ならず、人の應對、物のとりま

つかひなど、宜しきになふといふ。人に、禮儀なき時は、いかに、才藝ありとも、禽獸にひとしかるべし。されば、人の、尊ばるゝも、卑しめらるるも、多くは、其の人の、禮儀を守ると、守らざるに由ることなり。人々、よく、禮儀を守れば、れのづから、其の品格も高まり、風俗も、善美になりて、遂に、國の光彩ともなりぬべし。

文武天皇の大御言に宣はく、禮は、天地の經義にして、人倫の鎔範なり。道德仁義は、禮によりてひろまり、教訓正俗は、禮を待ちて成る。續日本紀

第三十一課

前田利家、或時、福島正則より、鯉を贈られければ、家來に命じて、謝禮の狀を書かしめぬ。其の書狀の中に、鯉魚二尾到來、満足せしむといふ失禮なる言葉あり。利家、これを見ていふやう、凡、禮狀は、つとめて、先方を敬ふべきものなり。其の文は、御意にかけられ、忝くところ書くべけれ。すべて、此方より、位卑き人などへは、尙更、懇切に、認めつかはすべきものなるを、我より、段階をつけて、人と見下さむこと、甚、あさはか

なる心得なり。以後は、必、斯様のことあるべからずと、ふかく誠めたりとなん。

茂りあふ木の間の奥にさく花の

いろ床しくも見ゆるもの哉 道葉歌合

第八 儉約

第二十二課

他人の難儀をすくひ、或は、世の爲、公利公益を起さむとせば、平生、よく、儉素を守り、其の備をなしおかざるべからず。然らざれば、其の心、いかに、善事を好み、善行となさむとすとも、時に



のぞみて、財用足らずば、如何ともなし難かるべし。また、他人の難儀を、我が身にひきくらぶれば、いかなる儉約にても、なし得らるべく、奢の念慮は起らざるものなり。

單なる人もぞあると世を知れば

薄きふすまもさえぬ夜半哉 拾塵集

第二十三課

儉約といふ事を知らざれば、無益の費ありて、家、貧になるなり。儉約といふは、無益の費をいまして、一錢をも、みたりに出さず、益ある事

には、千金をも出すべし。無益の費をいまして、益ある事につかふべき爲なり。貞丈家訓

堀秀政は、越前國を領して、すこぶる、徳望ありき。其の弟に、多賀出雲守といふ人ありしが、或時、秀政を怨むる事ありて、その國を去りぬ。秀政、其の由をきき、道にて飢ゑもやせむ。不便の事なりとて、黄金十枚を取り出で、人を走せて、餓らせたり。かくて、黄金をつゝみたりし紙をば、自、其の皺をのべて、箱にをさめ、近く仕ふる侍共に向ひ、およそ、財寶は、用ゐるべき事には、



十枚の黄金も、をしむに足らず。たゞ、無用の事には、この包紙をも、みなりに費すべからずとて、あつく誠めたりとぞ。

### 第九 改過

#### 第二十四課

過を改むるは、よき事と知りながらも、一時の人目を恥ぢらひ、とかく、繕ひて、其の非を果し遂げむとするは、惡しきことなり。此は、人を欺くよりも、自、欺くことの甚しきものにて、常に、心に慊からざるなり。ゆゑに、いやしくも、惡し

と知らば、たゆたふことなく、直に、これを改めよ。心中の爽快、之に過ぐるものなかるべし。非を改むることを憚らざるが、よきことなり。善くも、悪しくも、我があつる事なればとて、其のまゝに、心をも通しふるまふは、第一の難なり。竹馬抄

## 第二十五課

昔、信濃國更科郡に、丁吉といふものあり。若き時、心ざま良しからずして、ある日、わづかなることと言ひつゝのり、遂に、その妻を離別せり。然

るに、妻は、やさしき心の者にて、丁吉の父が、年老いて、病身なるに、看護するものなきを氣づかひ、丁吉の在らぬ間をうかひ、往きて、食物、藥等をすゝめ、親切に看護すること、前日に異らざりき。老人は、いよく、其の親切に感じ、丁吉の不孝なることを歎き居たり。或日、にはかに、丁吉歸りければ、妻は、いそぎて、物蔭にかくれしに、丁吉は、父の前に、種々の食物をどあるを見て、言葉あらくしく、誰がもち來りしぞと、あきりに問ひて止まず。妻は、まゝかねて、

走り出で、丁吉をいさめむとせしに、丁吉、大に怒り、汝は、離縁せしものなるに、今、こゝに在るは、物盜まむとて來りしなるべしとて、いたく罵りぬ。妻は、涙を流しつゝ、おもはぬ難題をば言はるゝものかな。妾は、此の家をいたされ、御身は、常に、家に居らず。誰ありて、老人の介抱をなすべき。いかに思ひても、老いたる舅をすつるに忍びず。故に、かく、毎日、ひそかに來りて、看護こそあたれと、言を盡していひければ、丁吉、その誠に感じ、やがて、悔悟せし面もちにて、

言葉を改め、我が行は、一として、善き事あらざり。が、今、汝の言ふことを聞き、俄に、夢のさめたる心地せり。以後は、かならず、心を改め、父に事へて、孝行をつくすべし。汝、ふたゝび歸りて、我と共に、父に事へよと、恥ぢ入りてわびければ、父も、妻も、大によろこび、元のまゝに、家に歸りぬ。これより後、丁吉は、全く、生れかはりたるむ人の如く、行を改め、よく、孝行を盡し、業をはけみ、ますく、善を行ひて、一家、むつまじく暮せりとぞ。



## 第十 忍耐

### 第二十六課

何事も、成ると、成らざるとは、其の艱難を、よく耐へ忍ぶと、否らざるとに在り。されば、いか程、才氣學識ありとも、忍耐の心なき人は、何事をなしても、遂に、成就し難かるべし。

古歌にも、

大丈夫は然待つ事のあればこそ

繁きなげきもたへ忍ぶらめ風雅集

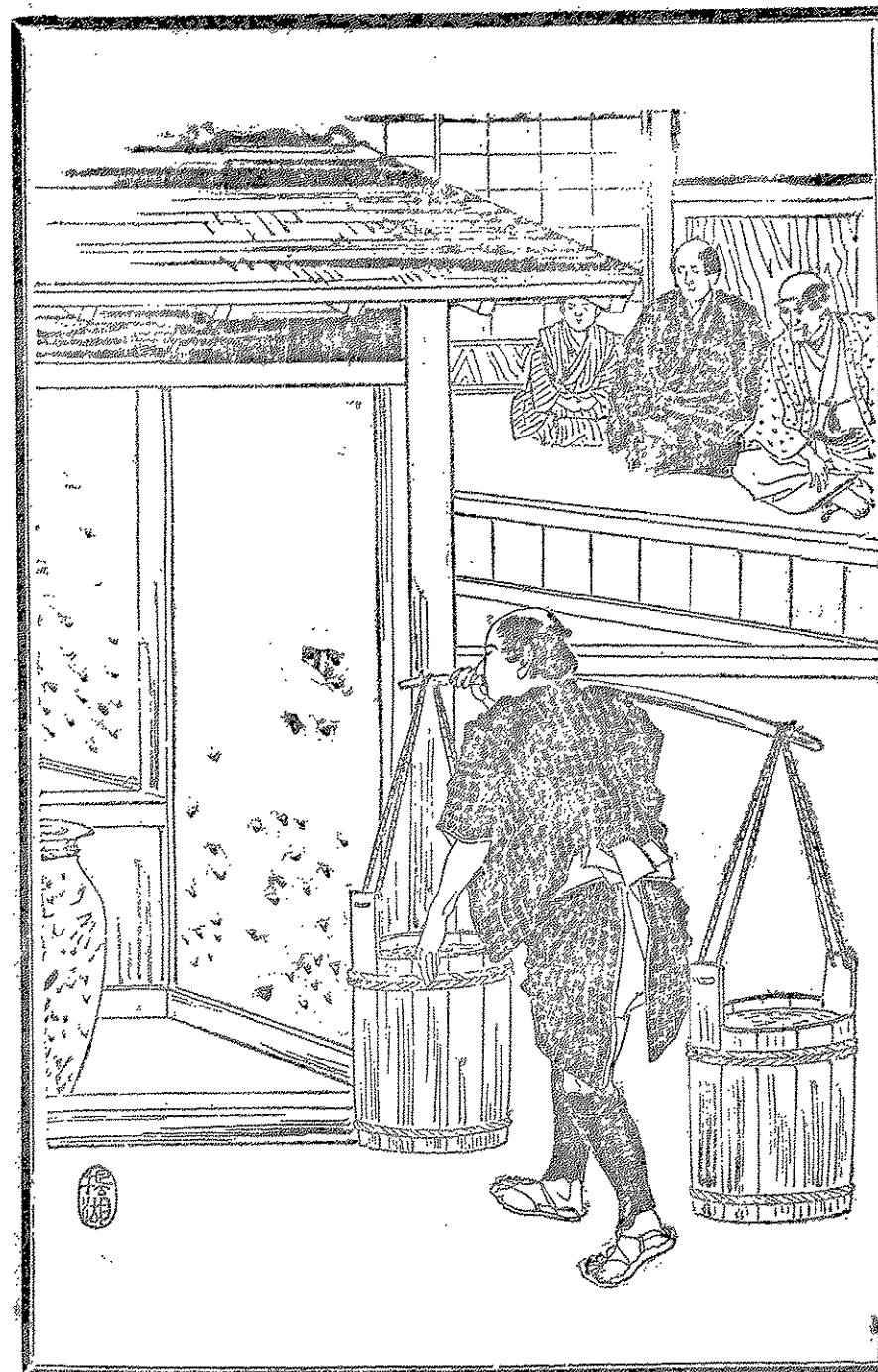
といふことあり。また、常々、我が心の慾を耐へ

忍ぶは、最、大切なことにして、この慎なきとき、何につけても、悪しきことの多きものなりと知るべし。

凡、忿と、慾とを忍ばず、心平に、氣やはらぎ、身安く、人にさはりなくして、耻なく、苦なく、後の憂なく、禍なし。忍の一字より、萬の善き事いづ。忍ばざれば、萬の悪しき事、是よりいづ。樂訓

### 第二十七課

昔、近江國に、吉松とて、貧しき子供ありき。十一歳の時、江戸にいで、伊勢屋といふ麴店に奉



公せしが、いかなる、艱難をゑのぎても、一度は、  
富有の身とならむものと、商賣に、心をつけ、長  
き年月の間、勤めむき、をさく、怠りなかりき。  
主人、ある朝、吉松の、商賣にいで行きて歸りた  
るを見て、水一荷汲み來れと命じぬ。吉松は、い  
また、朝飯も食はざる前なるに、少しもためら  
ふ色なく、遠く隔りたる井より、かひぐしく  
汲み歸れり。主人は、今一荷汲み來れと命じ、か  
くすること、三度に及びしも、吉松は、少しもい  
とふ色見えざりき。こは、主人が、吉松を試みた

るにて、そのありさまに、ふかく、感心し、やがて、下婢に、足をすゝがせ、新しき衣物を着せ、已と共に、朝飯を食はしめぬ。さて、店のもの一同を呼びいたして、吉松は、實に、辛抱強きものなり。今日より、我が店の番頭となし、一切の事を任すべければ、汝等、何事も、吉松の言付に従ふべしと言ひ渡しぬ。それより、吉松は、名を、吉兵衛と改め、一層、主人の命をつゝしみて、益、精勵し、後には、別に、一家を立つることを得て、遂に、富有の身となり、五十三軒の別家あるに至れり。

## 第十一 博愛

### 第二十八課

博愛とは、貧富貴賤にかゝはらず、人に、分け隔なく、わなじ様に、愛を施すといふ。而して、近きより、遠きにおよほすべきものなれば、まづ、己の親族朋友を愛するに起り、其の心を推して、廣く、他人にまでおよぼすべきなり。近き親類をおさて、先、他人を愛するが如きは、其の序とあやまれるものなり。

## 皇后陛下御製

四方の海皆はらからと睦びなば

世に波風はたゝじと思ふ

人世の樂は、みづから、善を樂しみ、人を救ひて、善をするにこえたる樂はなし。樂訓

第二十九課

青木善七は、羽前國の人なり。幼より、人をあはれむ心ふかく、人の難儀を見ること、我が身に於けるが如くなりければ、其の徳、たのづから、村内の人心を感化し、一村舉りて、兄弟の如くなりぬ。村内に、彌惣といふものあり。或時、租税

を納むること能はずて、他人より、拾七兩の金を借りしげ、其の返済の期日にたよぶも、之を償ふこと能はず、ふかく困しみ歎き居るよしを聞き、善七、かはりて、辨償しけり。又、卯右衛門といふものあり。居宅、いたく破れ、雨露にをかさるゝも、貧困にして、自、繕ふこと能はず。善七、これをあはれみ、金を與へて、修繕せしめたり。又、與左衛門といふもの、老ばぐ、不幸にあひ、すこしの年貢すら、納め兼ねたりしかば、善七、代りて、之を納め、別に、日々の生計をも助けた

り。又、慶應二年の頃、金八十兩を出して、村役場に預け置き、これを、潤農金と名づけ、極めて低き利子にて貸し與へ、其の利子をつみ置きたりしに、數年の後には、數百兩の金額となりぬ。善七、之を、一村の共有となし、貧窮なる者を救ふべき資本に供せり。かくの如く、多くの金を費し、慈善の事に、力をつくし、かば、領主、其の志をよみし、褒美を賜ひたり。後に、村内の人々も、善七の恩澤を忘れざる爲にとて、金を募り、其の紀念碑を建てたりといふ。

## 第十二 學問

### 第三十課

我等が、臣民たる本分を盡し、國家の助ともなるべきことをなさむには、必、まづ、學問を勉め、智識を研かざるべからず。智識なきものは、其の志、いかに善くとも、爲すこと拙くて、功を収むること能はざるものなり。されば、有用の材を増して、公益を廣めむとするには、一に、學問を以て本とすべし。

學問するに、道を知らむ事を以て、心とし、善を



行ひて、人を愛し、人を助くるを以て、事とすべし。これ、學問の要とする處、本を務むるなり。其の目あては、君子とならむ事を期するを以て、志とすべし。君子とは、道德によりて、獨行するを得る者なり。貝原義軒

第三十一課

皇后陛下御製

こんがうせきも磨かずば  
玉のひかりはそはざらむ  
人もまなびてのちにこそ

まことの徳はあらはるれ  
時計のはりのたえまなく

めぐるが如くときのもの  
ひかけをしみて勵みなば

いかなる業かならざらむ

柘植如水は、美作の人なり。はじめ、助三郎といひて、桶屋職を業とせり。助三郎、一日、或家にて、大學の講義あることをきき、頻に、これを聽かむことを欲し、主人に請ひて、其の席につらなりぬ。其の時の講義に、明德を明にすといふこと



とを説けり。明德を明にすとは、人の、自然にう  
けえたる善き徳を、詳に知るといふことなり。  
助三郎、これをきゝ、心に奮發し、おもふやう、  
吾、人間に生れたる甲斐として、いかでか、明德  
を明にし、人たる道を知らで止むべきと。それ  
より、職業の餘、心をひそめて、ふかく、學問をは  
けみければ、やがて、近國に比なき學者となれ  
り。

### 第十三 智能

#### 第三十二課

人の生るゝや、おのづから、天より受けえて、物の是非善惡を分別するものあり。これを、智能といふ。而して、學問は、此の智能をひらき導きて、ますます、廣大ならしめ、靈妙なるはたらきを備へしむるものなれば、人たるものは、學問をはけみて、充分に、智能をひらくべし。然らざれば、大事にあたりて、明斷を行ふこと能はざるなり。

### 皇后陛下御製

怠りて研かざりせばひかりある

たまも瓦にひとしからまし

### 第三十三課

昔、敏達天皇の御代に、船史辰爾といふ人ありき。その頃、たまく、高麗の國、朝貢して、表を上りしかば、天皇、數多の史にねはせて、之を讀ましめ給ひしに、よく、其の文を解き得るものなし。ひとり、辰爾は、詳に、これを解けり。天皇、大に、辰爾をよみし給ひて、常に、宮中に待せしめ給ひぬ。其の後、高麗、また、朝貢し、烏羽の表を上りしに、其の文字、判別すべからず。然る

に、辰爾は、更に驚かすして、其の羽を取り、飯甌を以て、これを蒸し、帛に印せしかば、文字、ことごとくあらはれ、はじめて、讀むことを得たり。天皇、御覽じて、大に嘆賞せさせ給ひき。

第三十四課

藤原長方は、剛毅にして、難にあふも、些も避くることなき人なりき。平清盛、都を、福原にうつし、より、上下、大に苦しみしが、或日、清盛、公卿を會し、平安と、福原と、いづれか便なると問ひけるに、人々、みな、清盛の意をむかへて、福原を

便なりといへり。然るに、ひとり、長方は、平安を便なりと答へければ、清盛、憤然、起ちて、内にいりぬ。已にして、清盛、ふたゝび、都を、平安の舊都に復し、上下、大に悦べり。或人、長方に向ひて、何によりて、相國にさかひ、平安を便なりと答へしと問ひけるに、長方、答へて、清盛、もし、悔心なかりせば、いかでか、人に問ふことをせむ。故に、我、たゞ、これを導きしのみと。聞くもの、皆、その機を見ることの敏なりしに感服しけりとぞ。

## 第十四 勤業

### 第三十五課

若き子弟のともがら、父母の家にある時は、父母に事へて、暇なきをよしとす。又、家事をよく勤めて怠らず、父兄の勞にかはるべし。家道訓  
飛彈國に、武川えいといふものあり。他に嫁ぎ、三人の子ありて後、夫、死にき。其の家は、農と、酒造とと業とせしが、夫、死にて後に、數百圓の借金ありて、いと困難なりしを、えいは、自はけみて、朝は、夙く起き、夜は、わそく寝ね、農業、酒造の

外に、養蠶ともなし、日々の帳簿の調まで、一人にて勤めぬ。かゝりければ、わづかに、十年ばかりにて、ことごとく、借金を償ひしのみならず、別に、酒藏をさへ増築して、いよく、家業を盛にせり。又、三人の子供には、充分の教育をはたこして、之が養育に、心をつくしければ、其の子供も、成長の後、よく、母に事へて、業を勉め、家は、なほだ、饒なるに至りたりとぞ。

## 第十五 正直

### 第三十六課



正直とは、誠を以て、事を行ひ、寸毫も、我が心に、やましきことなきをいふなり。もし、正直の心なきときは、道にそむき、理にたがひ、行、みたりになりて、遂に、人に卑しめられ、世に疎むぜらるべし。

人は、正直の士を以て、首とすべし。才あり、智あるもの、人を驚す功ありといへども、正直の士の、表裏なきにあかざるなり。人の盛衰を見て、心を變ぜざるは、たゞ、正直の士のみあり。雲山記談  
伏見天皇御製

天津空てる日の下にあるながら

くもる心のくまをためや風雅集

第三十七課

上野國新田郡に、谷平といふものあり。或時、市に行く途にて、小囊のわち居たるを拾ひ、之を開き見れば、紙にて包みたる金子五十兩ありて、知兵衛とあるせり。谷平、つらく思ふやう、隣村に、知兵衛といふものありて、家、甚、富めり。必、其の人の失ひしものならむ。而して、此處にれとせるは、知兵衛も、必、市に行きしなるべ

しと、囊を懷にして、いそぎ、市に至りしに、果して、刃兵衛にあへり。谷平、大に喜び、刃兵衛にむかひ、君は、おとしものあるべしと問ひしに、刃兵衛、頭をふり、否々とこたふ。谷平、再三問ひけれども、物など失ひし事なしといふ。よりて、谷平は、刃兵衛がかへるを待ち、其の家に行き、彼の囊をいたして、これ、必、君が失へる物なるべしと、拾ひたる事實をかたりぬ。刃兵衛、あへて受けずして、いひけるは、此の金、我が失ひしには相違なけれど、君が拾ひたる上は、君の物

となりて、既に、我が物にあらず。故に、受けざるなりと。谷平曰はく、我は、かへさむ爲に拾ひしなりと。互に争ひて、決せず。谷平、せむ方なく、囊をおきて、走り去りしかば、刃兵衛、やむを得ず、止めおきぬ。かくて、刃兵衛は、谷平が存生の間、年末ごとに、米三俵と、金貳分とを贈りて、其の厚義にむくいたりといふ。

## 第十六 義勇

### 第三十八課

義勇とは、義によりて、奮ひ起る氣象をいふ。人、

もし、この氣象を失ふときは、君國に事へて、己の本分を全うすること能はざるなり。我が國は、神代の昔より、武を尙ぶ風俗にて、我等祖先は、みな、義勇の氣象に富み、護國の心あつかりしを以て、嘗て、一度も、外國の侮をうけしことなし。されば、我等臣民に至りても、この氣象は、一日も失ふべからざるなり。

千萬の軍なりともことあけせず

とりて來ぬべき男兒と思ふ 萬葉集

第三十九課



河野通有は、伊豫國の人なり。後宇多天皇の御代に、元の賊、西海に寇せむとするきこえありければ、通有、大に憤慨し、賊きたらば、必みなとろしにし、寸毫の地も、神州を犯さしめざるべしといひて、一族郎黨をひきゐ、氏神三島の社に祈請し、九州の警衛にむかひしむ、元の賊船、果して來り、筑紫の海に充滿せり。我が軍、みな、築地を、前岸につきて陣したるに、通有は、築地を、後につかせ、前面に、幕一重はりて、賊をふせけり。一夕、通有、伯父の通時と、二艘の船に乗

り、賊船の中にわけ入り、大將の船とおぼしきに潛ぎよせ、橋をたふして、梯の代とし、賊船に乗りうつり、大刀、長刀にて、散々に切りまはり、終に、賊將を虜にし、賊船に、火をはなちて退さぬ。かくて、夜明けなば、ふたゝび、進撃し、海水を血にせむと、進みかまへたりしに、其の夜、大風おこり、賊船、ことごとく、海中に覆没せしかば、通有は、たゞ、其の刀にて屠らざりしを遺憾とせり。さて、通時は、創の爲に、遂に死に、通有も、おもき創を被りしかば、伊豫國にかへり、賊將の

首は、久萬成俊といふ人に持たせて、京都に上らせけり。この時、天皇、石清水八幡宮に行幸せさせ給ひて、九州の注進を待たせ給ひけるをりなりければ、畏くも、成俊を、ちかく召し寄せさせ給ひ、またしく、通有が勳功を、御感賞の宣旨を下され、肥前、肥後の地數个所と、伊豫國山崎庄とを賜はせられたり。

第四十課

豊臣秀吉、朝鮮を征伐せし時、加藤清正、機張といふ處に陣しけるに、明國、數十萬の兵をつか

はし、蔚山へ、押寄するよし、注進ありければ、清正、直に、蔚山に赴かむとす。老臣等、諫めて曰はく、部下の兵、三分の一は、既に、蔚山にあり。今、此の勢を分ちて、蔚山に遣らば、當城に残るもの、やうやく、三分の一にて、數十萬の敵にあたらむこと、甚危し。よろしく、諸軍の援を待ち、おもむろに、之を計り給へと。清正いへるやう、卿等のいふ所、理なきにあらねど、蔚山の城は、我が部下の者を籠らせおきたる所なるに、この報知を聞きながら、悠々として、援を待つうち、

し、落城せば、清正が恥辱、此の上やあるべき。敵は、遠方より來りしなれば、未、陣取かたかるまじ。且、かれ、大勢をたのみて、我が小勢を侮り、必、油斷あるべし。これ、時を移さずして討つべき好時機なり。すべて、戦は、敵の多少にかゝはらず、討つべき時と、討つまじき時とを、よく鑑みるを要す。たとひ、今、敵、幾萬人ありとも、卿等、身命をかへりみず、清正が下知にたに従はば、蔚山の城に入らむこと、大道を行くが如けむと、大音にていひければ、士卒ども、これを聞き、

大に勇みたちて、明の大軍を、物ともせず、眞中をつき破り、遂に、すゝみて、城中に入る事を得たり。清正は、かく、剛膽勇武の人なりしかば、今に、朝鮮の人は、鬼上官と稱へて、はなはた、畏敬し、小兒の如きは、鬼上官來ると聞けば、直に、その泣きと止むる程なりといふ。



等小學修身書卷之一終

高等小學修身書卷之一終

定價金拾錢

明治二十五年九月二十五日印刷  
明治二十六年十月三日發行  
明治廿六年十二月廿一日訂正再版印刷  
明治二十七年一月七日訂正再版發行  
九月十五日校訂三版印刷  
九月十八日校訂三版發行

著者 伯爵

東久世通禧

東京市麻布區本村町百八番地

西澤之助

東京市京橋區築地二丁目一番地

國光社圖書部

東京市京橋區築地二丁目一番地

版權所有

發行兼印刷者

發兌



a1380725595a  
福岡教育大学蔵書